

会長の任期を終えて

朝倉清高 (北海道大学)

小杉信博先生を引き継いで2019年10月より放射光学会長を仰せつかりました。幹事の皆様、評議員の皆様、会長経験者の皆様、事務局、会員の皆様のおかげでなんとか2年間で全うすることができました。ありがとうございます。

就任当初、小杉前会長がミッション毎に放射光施設を3つのカテゴリに分けられましたので、それを引き継ぎそれぞれのカテゴリごとに放射光施設のミッションに協力し、これも小杉前会長が始められた施設代表者会議を定期的に行って放射光施設間、量研室との意見交換や放射光施設からの要望を聞くことで、放射光施設それぞれの進展への協力をすることとしました。小杉前会長がすすめられ、学会会議マスタープランに採択された放射光学術基盤ネットワークの文部科学省のロードマップ登録をPF, HISOR, UVSOR と一緒にめざしました。

2020年の放射光学会の時の評議員会では(最後の対面の評議員会でしたが)、webを通じた放射光学会の情報発信充実に向けた広報委員会設置、当時蔓延していたEMOTETコンピューターウイルス対策として、クラウドによる情報共有などを行い、60周年を記念した国際シンポジウムの開催準備委員会を設立しました。また、高良和武先生・佐々木泰三先生の追悼集会も無事に終えることができました。

3月頃から新型コロナウイルスの感染が拡大し、状況が一変しました。ちょうどPFからKEK機構長当てにマシントイムに関する要望書の依頼を受けてその原案をつくり、また施設代表者会議を準備している最中でした。未曾有の事態に、60周年の事業の延期、評議員会などの会議は全てオンラインで行うことにしました。放射光年会もかなり早い段階でオンラインでお願いしました。学生支援のため学生会員の年会費免除や放射光施設でのクラスター発生防止と放射光の新型コロナ研究への重点化などについて施設の方々とメールで議論しました。対面での議論ができず、混乱のなか、多くの先生がたにご迷惑をおかけして、大変に申し訳ありませんでした。

このデジタル化へ強制されたことで、デジタルのよいところ、悪いところが見えてきました。デジタルでの会議のメリットは、参加者が参加しやすいことです。また旅費が節約できます。さらに各自の画面に表示されますから、見やすくなりますし、マイクをオンにすることで、皆さんが聞きとりやすくなります。チャットで発言することもでき、意見表明がしやすくなります。オンライン化によ

り基礎講習会の長年の課題だった集客に一定の解答が与えられたと思います。オンライン会議により、中性子、ミュオン、陽電子と言った加速器を使う学会長との連携会議をはじめることができました。こうしたデジタル化によりコミュニケーション量は格段に増加したと思います。皆さんとのいろんな議論を通じて、私自身が感じたことは、意見は異なるけれども、皆さんが放射光に対し、強い思いをもっているということです。放射光科学、放射光技術をいかに発展するかという共通項で、有益な議論ができたと思います。

一方で、実際に対面の場合には、声以外の様々な要素でコミュニケーションが行え、迫力が違うと思います。さらに会議の前後には、雑談や飲み会というコミュニケーションがあり、親密な関係と情報交換ができます。今後は対面の会議が復活すると思いますが、オンラインの良さや対面の良さを取り入れたハイブリッドタイプを早急に検討実現することが必要と思います。

こうしたデジタル化の流れは、従来の放射光実験のあり方を大きく変化させました。これまで、放射光実験は放射光施設に赴いて、徹夜で実験するのが当たり前でした。しかし感染防止の観点から、テレワークタイプの実験が実現してきました。それには、新しい可能性と検討課題があると思いましたが、木下豊彦先生を委員長としてリモート実験等諮問委員会をスタートさせました。詳細は雑誌「放射光」の報告書を見ていただくとして、その会議自体が完全にオンラインで行われました。これにより、委員が参加しやすくなり、ひと月に一回のペースでほぼ全員の参加のもと、施設と学術ユーザ、企業ユーザがそれぞれの立場から様々な発言がなされ、議論することができました。ここに、学会の本来の姿を見た気がしました。

最後にこの2年間支えていただいた庶務幹事の田旺帝先生、会計幹事の高橋嘉夫先生、行事幹事の小嗣真人先生、渉外幹事の中村哲也先生、編集幹事の関山明先生、広報幹事の和達大樹先生(若手連絡会も兼任)、評議員会議長の船守展正先生そして事務局の佐藤亜己奈さんには厚く感謝したく存じます。ありがとうございます。放射光データの扱いの問題、高良賞・佐々木賞制定の問題、60周年記念事業など多くの宿題を残してしまい、横山利彦会長に申し訳ありませんが、横山会長のもと、デジタルという新しい力を得た放射光学会がさらに発展されることと思います。

2021年度幹事報告

庶務幹事を終えて

田 旺帝 (国際基督教大学)

2019年10月より2年間、朝倉会長体制で庶務幹事を務めさせていただきました。2021年9月末日をもちまして任期満了を迎えることができ少しほっとしているところです。任期中は先人の方々が整備された学会運営方針の上で、選挙、評議員会、総会、学会各賞授与などの定常的な学会運営を円滑に進めることができました。多くの皆さまからご協力・ご支援をいただいたこと、心よりお礼申し上げます。

2年間の任期を終えるにあたり行事を振り返ると色々と思い出されます。任期のはじめはマスタープラン2020(「放射光学術基盤ネットワーク」)の引継ぎ、日本放射光60周年記念行事の提案、評議員会、総会、学会各賞授与など定常的な業務が滞りなく運営できました。しかし、2020年2月に入ってから状況は一変、COVID-19により社会全体がこれまでに経験したことのない混乱の渦に置かれました。学会運営も例外ではありませんでした。会長主導で迅速に事業継続計画を策定し、学会活動を維持できる様々な方策を実施しました。行事幹事を中心に各種会議や行事を全てオンライン化したこと、会計幹事からは景気悪化を見据えた学会収支方針や研究活動や学生支援策、退会抑制のための会費猶予や会費免除などあらゆる方策が提案され、評議員会の承認のもと迅速に実行されました。また、新設の広報幹事を中心に放射光学会ホームページの革新やマイポータルへ整備を進め、拡大放射光施設長会議を通じ得られた、COVID-19に関する各施設の現状と対応、今

後の方向性について放射光学会会員への情報提供や利便性向上に積極的に取り組みました。さらに、リモート実験等諮問委員会では、放射光実験のリモート化やその運営について、ユーザーと施設、そして放射光学会が一丸となって、研究支援体制の構築に取り組みました。このように、朝倉体制では学会全体としてチームワークと連携の良さを認識できた2年間でありました。

一方で、課題もありました。まずは、小杉会長体制から入念に準備を進めたマスタープラン2020が不採択という、大変残念なできごとです。しかし、学術基盤の強化とネットワーク化を進め、わが国の放射光科学を継続的に向上させる体制を構築したい熱意は消えることはないと思います。2021年6月には日本中間子学会、日本中性子科学会、日本放射光学会による三学会会長会議が行われ、新しいマスタープランの策定について議論が始まりました。今後の採択を強く祈願しております。また、任期後半より、学会のプレゼンスのさらなる向上を目指した新たな学会賞の提案については十分にまとめることができず、次期体制へ引き継ぐこととなりました。この件については、横山次期会長体制で会員の皆様の積極的なご提案をお願いしたいと思います。

今後、2年間の貴重な体験も踏まえ、日本放射光学会の発展に貢献できるよう精進してまいりたいと思います。2年間有難うございました。

行事幹事を終えて

小嗣真人 (東京理科大学)

一言でこの行事幹事を振り返ると“新型コロナウイルスに翻弄された2年間”でした。

行事幹事は放射光学会において非常に重要な業務であり、基礎講習会、年会合同シンポジウムまた若手研究会など、様々なイベントを取り纏める重要な役どころであります。皆様の研究交流を下支えする重い仕事となりますが、コロナ禍でその業務は大きく揺れ動きました。

2019年9月には(本当に)軽い気持ちで朝倉会長からの任をお引き受けしたのですが、2020年の1月に国内最

初の感染者が発生し、そこから大きく予想を外れていくこととなります。未だコロナ禍は終息をしていませんが、軽く振り返りながら個人的な中間評価を纏めておこうと思います。

まずコロナ禍において強力な武器となったのはZoomなどのIT技術で、オンラインミーティングを積極的に取り入れていきました。まず基礎講習会は完全なオンライン化を早期に決めて準備を行いました。当時はZoomも浸透していなかったもので、マニュアルや著作権の取り扱い等の整

備を行いました。その一方でオンラインの利点を活用し、クリック一つで基礎講習会に参加できるよう、手続の簡素化するなど、様々な工夫を行いました。その結果、参加者は過去最高となる168名にお越しいただくことができました。嬉しいことに海外からも参加がありオンラインの強みを活かしたのでは無いかと考えております。さらに新しい試みとして講義動画を録画してオンデマンド配信も行いました。二年分の動画コンテンツを整備することができたため、今後は例えば「放射光入門用動画コンテンツ」のような新しい放射光教育の土台になればと考えております。

続いては年会の振り返りですが、年会は1000人近い放射光関係者が集う年一回の大型イベントです。学生、研究者、行政、出展企業など様々な要望に応えつつ、参加者の安全と健康を確保する必要がありました。現地開催とするかオンライン開催とするか何回も検討を重ねましたが、2020年秋に様々な学会がオンライン化したことを反映し、非常に重い決断ではありましたが、放射光学会もオンライン開催に舵を切りました。オンライン化にあたっては実行委員会と業者を交えて日夜メールが飛び交う異常事態が開催直前まで続き、文字通り突貫工事の準備でしたが、広島大学のスタッフのご尽力のおかげで、なんとか開催にこぎ着けることができました。オーラルではZoomによるオンライン発表、ポスターは例年とは少し形式が異なりましたがショートプレゼンによる口頭発表の形で、なんとか発表の場を確保することができました。企業展示は大きく苦勞した所で、オンライン商談ブースを設けるなどして工夫したものの、実物を見せられないもどかしさがあり、放射光学会に限らず、今後も検討は必要かと思いましたが、参加者の皆様には多々ご不便をおかけしたかと思いますが、

この場を借りてお詫び申し上げます。その一方でオンラインの利点を活かし、セッション内で出展企業にセミナーをする新しい試みも行いました。これが思いのほか盛況で、多数の申込みをいただくことができました。一点良かったのは財政面で、160万円を超える黒字で年会を終了することができました。コロナ不況が危惧される中でポジティブな結果で終わることが出来て安堵しています。このようにJSR2021は小規模ながらも、開催できたことに大きな意義があったと今では思えます。何よりこのようなドタバタの中でも、何とか工夫をしながら前に進む点は、いかにも放射光学会らしく、これで良かったのではないかと個人的に考えています。

また若手研究会も積極的なオンライン化が行われ、提案者の若手研究者の先生方もオンラインツールを活用され、DX時代の新しい研究会の形を实践おられて大変心強く感じました。

最後に反省点ですが、オンライン化に伴って失われたものが一つあります。それは対面の懇親会が行えなくなった点です。研究の議論が懇親会で花開くことは多々あり、そのような機会が失われたのは大変寂しく思っております。どのような時代になっても研究を作るのは人であり、人と人を繋ぐ場が学会であってほしく思っています。新型コロナウイルスの問題は未だに先行き不透明ですが、いつかこの問題が終息した際には、皆さんと対面でお会いし、懇親会でお酒を飲み交わせる日を心から楽しみにしています。

末筆となりましたが、未熟な私が行事幹事を無事に終えることができたのは、事務局の中村さんと佐藤さんの多大なるご尽力の賜物です。この場を借りて厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

編集幹事を終えて

関山 明 (大阪大学)

前任の籠島靖先生(兵庫県立大学)から引き継ぎ2019年10月から2年間、編集委員長を務めました。この期間、私自身の本務先での立場変化とCOVID-19対応が直撃し何度か業務を滞らせてしまったところ、事務局の多大なご支援によりなんとか全うできたように思います。これに加え記事を執筆いただいた方々、編集委員の皆様、そして会長をはじめとする幹事の先生方のご協力によって学会誌「放射光」を発行し続けることができました。この場を借りて心よりお礼を申し上げます。

私が編集委員長に就任する直前に単行本「改訂版 放射光ビームライン光学技術入門～はじめて放射光を使う利用者のために」が発刊されましたが、こちらの方は発刊後特

に問題もなく編集幹事として対処が必要なことはありませんでした。これは単行本編者の大橋治彦先生と平野馨一先生、そして籠島先生をはじめとする前任の編集幹事のご尽力によります。改めて感謝申し上げます。

特集号は、33巻4号で「時間軸でみる高輝度放射光/X線自由電子レーザー利用研究」、34巻第3号で「赤外自由電子レーザーの現状、利用研究と展望」を企画しました。前者は、近年利用研究の進むX線自由電子レーザー、加えて放射光のパルス性を利用した時間分解/時分割測定に関するものです。これにはX線自由電子レーザーの発展も大きく寄与していますが、自由電子レーザーとして初めて発振に成功したのは中赤外光でした。日本には複数の赤

外自由電子レーザー施設があり広く利用研究されていますが、これらを俯瞰する解説としては学会誌としては後者の特集号が初めてとなります。また、この原稿が掲載される34巻6号には小特集「協奏的量子ビーム研究の最前線—蓄電池・ソフトマター—」が企画されています。

私が大学院生として放射光の世界に入った時は学会として黎明期と言えた放射光学会が今ではそうではなくなったことを痛感するのが、佐々木泰三先生（2代会長）、石井武比古先生（4代会長）の訃報でした。宮原恒昱先生（33巻1号）、柿崎明人先生（34巻5号）にそれぞれ追悼記事をご執筆いただきました。数少ない（ことを願います）追悼記事を通して若い方が日本の放射光の歴史を迎えるようにすることも学会誌の役割の一つかもしれません。

この2年間、世界はCOVID-19によって大きな変化を強いられました。学会誌や編集委員会も例にもれず、学会誌は年の最後の6号に掲載されていた翌年1月の放射光

学会年会プログラムがなくなりました。会議としての編集委員会は2019年11月が最後の対面実施で、それ以降は全てオンラインで実施しました。実のところ接続が安定な限りオンライン実施の方が対面実施よりメリットが多いように思いました。COVID-19出現は「近未来に実現すべきことの前倒し」を要求している面が多分にありますが、一部の課題は現編集幹事の若林裕助先生（東北大学）に引き続きご検討いただくことになり迷惑をかけたままの退任となってしまいました。

放射光学会は、異なる分野と手法が放射光というキーワードで集まり学際性として際立った存在です。そして学会誌「放射光」は集まった皆様の繋ぐ媒体として重要な役割を果たしています。皆様が学会誌をより一層ご活用いただくことが当学会の発展にも重要と思いますので今後ともよろしく願いいたします。

渉外幹事を終えて

中村哲也（東北大学国際放射光イノベーション・スマート研究センター）

令和元年10月より2年間にわたり渉外幹事を担当し、9月末で任期を終え、高輝度光科学研究センターの熊坂崇様に引き継ぎさせて頂きました。任期中は新型コロナウイルス感染症の拡大により海外のみならず国内の移動も著しく制限される結果となり、そのため当初計画したAO-SRI2020（仙台開催）が延期となるなど、学会活動に大きな影響が生じました。しかしその一方で、オンライン学会や研究会に関して、他学会等から放射光学会への後援・協賛依頼、および、ホームページ掲載やメール配信の依頼を多数頂き、対

面とオンラインの相違はあっても学術面での積極的な交流は継続されていたと振り返ります。また、放射光学会としても、従来は渉外幹事の担当であった広報活動について、あらたに広報幹事および広報委員会を設置してアウトリーチを強化する幹事会構成となったことは、ポストコロナにおいても一層活かされていくものと期待しています。最後になりますが、2年間の任期中におきまして幹事会および評議員会の先生方皆様から賜りました御指導、ならびに、本学会の会員皆様のご協力に厚く感謝申し上げます。

会計幹事を終えて

高橋嘉夫（東京大学）

朝倉前会長から仰せつかり会計幹事を2019年10月から2年間務めさせて頂きました。この2年間で本会会計関連において一番大きな出来事は、世界のあらゆるものと同様に、コロナ禍でした。学会運営においては、コロナ禍により格段に進んだりモート会議により、会議費経費が大幅に減少しました。一方、当初は経済的な理由による会員数の大幅減も懸念されたため、本会では会員からの申し出があった場合に2021年度分の会費を1年猶予することを決め

ました（最終的な適用者は無し）。また2021年度における学生会員の会費無料化も行い、それは次期執行部にもご承頂き2022年度も継続されます。しかし、最終的には、コロナ禍による会員数の大幅な減少は見られず、本会財政への影響は軽微でした。その他、放射光基礎講習会は、小同行事幹事の多大なご努力により、オンラインのメリットをフルに活用して盛況となり、財政的にも収支のバランスがとれた会となりました。またオンライン開催となった年

会も、登録者数に大きな変化は無く、黒字となりました。以上から、コロナ禍に見舞われたこの2年間は、会議費の減少に対して財政的な負担増が殆ど無かったため、本学会計収支は黒字が拡大する方向に向かいました。

実は本会の財政は、これまでの学会執行部の諸先生方のご尽力と会員の皆様のご協力によって、毎年繰越金が増加する状況にあります。これは学会の安定運営や不測の事態への備えとしてはよいのですが、一方で将来に向けた投資や会員増への取組みなどの有効な活用法を考えていく必要があります。このような取組みの1つとして、新幹事として設置された広報幹事の和達先生を中心に、会員マイページシステムが導入され、会員の皆様の利便性が高まったものと思います。一方で、若手育成の施策として2019年度より開始された「大学院生の国際活動支援奨学金」に

より、AOFSSR スクールへの若手の派遣の支援を進める予定でしたが、AOFSSR スクールがコロナ禍で未開催となり、実際にこの支援が軌道にのるのは、コロナ禍が収束して以降になります。こうした取り組みはあるものの、今後会議のオンライン利用がある程度継続され、また年会収支が黒字を続けるようであれば、その資金を活用した投資を行い、若手研究者の育成や異分野交流の場として本会がさらに発展していくことを願っております。

最後になりましたが、私が会計幹事を担当する上では、引継ぎ時には前任の稲田康宏先生（立命館大）に、任期中は朝倉会長はじめ各幹事の皆様、そして事務局の佐藤亜己奈さんに大変お世話になりました。至らぬ幹事をサポートして頂き、本当に有難うございました。

広報幹事として これまでと今後の活動

和達大樹（兵庫県立大学）

昨年2020年4月1日から広報幹事に就任いたしました、1年半ほどが経ちました。今回から新設された役職ということで、ほかの幹事の方々より半年短い任期となりました。前任の方の引き継ぎなどがなく、新たにやることを見つけることが仕事となりました。放射光学会の活動を会員のみでなく世間に分かりやすく伝えることが活動の主であると考えています。

まずは、「新型コロナウイルス対策に関する取組み」のホームページを作成し、各放射光施設のコロナ対応情報と課題申請等の取組みをまとめてお伝えすることを目指しました。このページなどからリモート実験についてもその重要性が認識され、さらに大きな議論が、最近のリモート実験等諮問委員会などで行われました。このような一つの流れに貢献できたと思っています。

また、会員の皆様の利便性を高め、円滑な学会運営のため、会員マイページシステム「SMOOSY」を導入しました。最近このようなシステムが導入されている学会が増えているというだけの理由ではありません。請求書や領収書のペーパーレス化を実現し、会員の皆様ご自身がマイページ

で請求書・領収書のPDFをダウンロードできることや、会費の入金確認が容易にできることなど、導入によって多くのメリットを今後感じていただけたと思います。

そして横山会長の下、さらに2年間広報幹事を続けることになりました。マイページにおいては、年会の参加登録との連動、学会誌電子版の閲覧、などが可能にできないかと考えています。また、学会ホームページについては、今後全面的な改訂を行い、最近の放射光科学の大きな流れを発信すること、周辺分野との壁を打破すること、会員間の交流、特に賛助会員と学会員の交流を図ること、などを目指します。そして大事なこととして、若手部会の活性化も行いたいと感じます。若手部会によるイベントはここ2年程度行われていないようであり、世代交代も含め、若手主導のミニ研究会などを定期的で開催できるようにしたいと考えています。

以上のような目標のもと、今後2年の任期で学会の広報のために全力を尽くしますので、会員の皆様のご指導、ご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。